学生たちの感想文から

学生たちは毎晩、一日のスケジュールを終えてから日記形式の感想文を書き、第 26 回訪日の記録とした。以下、その一部を紹介する。

日　付：11月28日（火）【1日目】
大学名：中国人民大学
氏　名：周薇

どれほど沢山の言葉も実際に自ら目にすることには及ばない。今回の日本訪問は私にとって初めての出国であり、多くの新たな発見があった。入国の際からすでに日本の人々の親切さが感じられ私はひたすら「ありがとう」の言葉を口にしていた。JAL SKY MUSEUM を後にする際、スタッフは手を振り続け私たちとのお別れをするなど、日本人の接客の始めから終わりまで常に存在する誠意というものを私は強く感じた。また客室乗務員の制服体験において、企業側は制服を羽織って貼り付けるタイプにデザインしており、着替えの時間を節約するなど利便性を高めることで多くの見学客が制服体験をできるようにしていた。こうした点からは日本人のゲストへの配慮そしてゲストに寄り添ったサービスの姿勢が感じられた。

飛行機内での食事の際、初めて植物肉を口にしたが、そのおいしさやヘルシーさに私は虜になった。またミュージアムの見学では JAL の将来にむけた取り組みについても紹介がされており、そうした取り組みにおいても JAL の健康や環境保全への一貫性の他、資源の節約への配慮が示されていたが、こうした点は日本という国全体の特徴であると感じた。

日　付：11月28日（火）【1日目】
大学名：北京外国語大学
氏　名：姜子洋

初めての日本訪問だったが、私自身日本語を長年学んでいたことから、なぜか周囲の物事へのある種の既知感があり、多くの物事が書籍の世界から私に向けて飛び出してきたような感じがした。初日は移動が多くやや疲れたが、それでも多くの収穫が得られた。JAL SKY MUSEUM の見学では航空業界に関する多くの知識が得られたが、特にボーイングの各機体の特徴に関する日本語の紹介は印象的で、日本航空のスタッフからはボーイングの 3 つの機体の主翼、尾翼そして機首の違いについて紹介があった。その後私たちは JAL の便で大阪に移動することになり、天候の問題でフライトはやや遅れたが、日本国内を飛行機で移動するということは個人的に興味深い体験であった。そして到着も遅くなったため、必要なものを少し買って休息することとなった。ホテルに関しては中国と日本の違いを感じた。中国では安いホテルでも客室の面積が広いが、日本では客室の面積はさほど広くはない。この点については中国と日本の国土や生活習慣の違いと大きな関係があると思う。中国は相対的に国土面積が広いため、人々は広めの面積の住居を好む傾向にあり、これはまた自らを社会と一体とする安心感や帰属感とも言え、ホテルでの宿泊においてもこうした点が示されている。だが日本は島国で国土面積が狭いため、人々は建物自体の広さを諦め、多階層にすることで住居を広くしている。また日本の国土は狭くて長いことから、人々の旅行にかける時間も短く、日帰りもしくは滞在日数が短いといったことも日本のホテルの客室の面積が比較的狭いことにつながっているのかも知れない。

日　付：11月29日（水）【2日目】
大学名：中国人民大学
氏　名：張逸凡

一介の工場の従業員から現在のような様々な家庭そして世界の隅々まで知れ渡る家電ブランドに成長するまでの過程においては、神のような経営戦略の他、いかなる時でも責任を全うするとの「心」がそれ以上に大切なのだろう。

初日の移動を経験した私たちの 2 日目のスケジュールはかなりゆったりしたもので、まず私たちはパナソニックミュージアムを訪れ、「経営の神様」と称えられたパナソニックグループの創業者である松下幸之助氏と時空を超えた交流を行った。そして私たちは、この誰もが知る家電ブランドの成長の裏には多くの知られざる苦労や紆余曲折があったことを知ることができた。松下幸之助氏そしてパナソニックグループは時代の変化に伴う浮き沈みにおいても常に我慢強さと団結そして実質を重んじ創造するとの精神さらには社会的責任感を守り続け、ついに現在の大きく発展した活気に満ちた総合電機メーカーへと成長した。パナソニックは私たちの父母の年代から彼らと共に成長するなど、私たちの世代の家電製品へのイメージに深く根付いており、この点に関し私は幸運と共に幸福を感じた。午前のヒューマンケアに対し、午後のスケジュールでは自然を感じることができた。霊山観音の下で抹茶を味わい、1 本の線香が燃え尽きる時間座禅をし、明るくきれいな秋の景色の中で豊臣秀吉のこれまでを追憶する、こうした体験を通じて私たちは「数樹深紅出浅黄（部分的な紅葉が浅黄の木々に目立つ）」の本当の意味を知ることができた。

日　付： 11月29日（水）【2日目】
大学名： 中国石油大学
氏　名： 蘇奕静

この日私たちはまずパナソニックミュージアムを訪れ、松下幸之助歴史館とものづくりイズム館をそれぞれ見学し、パナソニックの創業の歴史について理解を深めた。1978 年に鄧小平副総理（当時）がパナソニックを訪問し、1979 年には松下幸之助氏が鄧小平副総理（当時）を訪問し、また 2018 年には松下幸之助氏が「中国改革友誼奨章」を受賞するなど、パナソニックは中国と緊密な関係を構築している。個人的には同社の Panasonic GREEN IMPACT の理念が印象深く、それは先進技術により環境に優しい再利用可能な製品を生み出すことで持続可能な発展との目標の実現を目指すというものである。その他、同社のエコクラウドシステムは店舗の省エネをサポートするもので、60 年来の事業経験から監視、分析、予測、調節との機能を実現することを目的としている。これらの技術やシステムから私はイノベーションの能力の育成に努めると共に失敗を恐れない毅然とした強さを身につけることの必要性を感じた。

次に私たちは文化体験をするべくバスで京都を訪れ、そこではまず茶道と座禅を体験した。日本の茶道文化は中国の茶文化と大きく異なっており、中国の伝統的な茶芸ではお湯で茶葉を浸すが、日本ではお湯で抹茶を溶かす。また茶を飲む際のマナーにも大きな違いが存在するなど斬新で独特な茶文化を体験することができた。座禅についても中国のそれとはやや異なっており、日本の座禅は呼吸に重きを置き、丹田呼吸法が使われていた。茶道や座禅を通じ私は文化的な違いについて認識することができた。また私たちもそうした違いを受け入れると共に、違いは違いとして尊重しながら共同点を探るとの姿勢で伝統文化を継承していく必要があると感じた。

日　付： 11月29日（水）【2日目】
大学名： 北京外国語大学
氏　名： 黄宇彤

空が明るくなってきた頃、私たちはパナソニックミュージアムを訪れテクノロジーの歴史への探索を始めた。ミュージアム内で同社の発展の歩みに没頭した私は時間が逆流したかのようにテクノロジーの発展の道筋を感じ取ることができた。創業当初の製品から今日のスマートテクノロジーまで、各展示品は時代の変遷を物語っていた。

またそれ以上に心を引かれたのは創業者である松下幸之助氏の歴史であった。様々な展示品から私は同氏の創業における理念の他、技術への弛まぬ追求そして社会的責任というものを強く感じた。パナソニックの発展や変化のプロセスにおいて同氏の精神は会社としての中核的思想であるだけでなく、それ以上に世界におけるテクノロジーの発展への大きな貢献であると言える。同氏の銅像の前で私は敬意や感慨を胸に手を合わせ黙祷した。

昼食の後、私たちは歴史と雅やかさが共存する京都に向かった。移動中は日本の田舎の静けさそして様々な文化的要素を感じた。そして京都に到着した私たちは日本の伝統的な茶道という格別の体験を行った。深い茶の香りの中、私は日本文化における味わい深さや奥ゆかしさを感じ取ることができた。茶道における一連の所作を通じ、生活と

は忙しさや追求のみならず、心の落ち着きが必要なものであることを私は知った。

次いで、座禅文化の体験となった。目を閉じ、息をひそめ心を静めると、思考がはっきりするのと同時に瞑想による静寂を感じた。この静かな空間において、私はいかに生活においてバランスを整え、心の落ち着きを維持するのかを学んだ。ここではまるで時間が止まったかのようで、座禅の境地において私は心の浄土を見つけることができた。

夕刻、私たちは高台寺を訪れ、うっとりする程美しい秋の紅葉を観賞した。そこでは夕日が寺院の屋根を照らし紅葉を一面の黄金色に染めていた。そして歴史ある建築物が自然と融合する中で、私は深みのある悠久の歴史を感じた。紅葉の1つひとつがこれまでの年月の立会人であり、高台寺は絵巻のように静かにそしてとても美しく佇んでいた。

この日の体験を振り返ると、まるでタイムトンネルに身を置いているかのようであった。最高のテクノロジーから伝統的要素まで、私は日本文化の多様さと豊富さを深く体験することができた。今回の旅はテクノロジーと伝統の融合であるのみならず、それ以上に心への洗礼であった。そしてこれらすべてが私の未来への期待と探求欲を高めてくれた。

日　付：11月30日（木）【3日目】
大学名：北京第二外国語学院
氏　名：李莫

大阪大学での交流では、まず同大学の先生による解説の下、核物理研究センターにおいてサイクロトロン施設の見学をした。今回の中国大学生訪日代表団は様々な分野を学んでいる優秀な学生で構成されていることから、彼らと共に学ぶ中で自身の専門分野以外の知識も多く得ることができた。例えばこのサイクロトロン施設が生み出すエネルギーはさほど大きくはなく、主な応用分野は特定の小規模実験或いは医療用とのことである。また世界的にも大阪大学の AVF サイクロトロンは磁場の安定性とエネルギーの整合性で名高い。

その後の学生との交流では、私たちのグループは両国の大学生の違いをテーマに討論を行った。そしてカリキュラムや単位の状況、サークル活動、学生寮、両国において一般的な誤解など様々な話題を巡り議論を交わしたが、その中で私は日本の大学生の熱意や学問への真摯な姿勢を感じた他、さらに様々な学問を専攻する学生らとの交流では各自の役割分担により最終的に、私が起草し、人民大学の張さんと北京大学の何さんが日本語と英語で取材と記録をし、北京外国語大学の姜さんと大阪大学の学生が発表したグループとしての成果をまとめることができた。

その後、私たちは日本の有名な温泉地である箱根に向かった。箱根は温泉の聖地であるだけでなく、有名な長距離走イベントである箱根駅伝も開催される。この箱根において私たちは盛り沢山で伝統的な日本料理に舌鼓を打った。その際、私たち代表団の 5 つの大学の学生は懇親会を開催し、歌やダンスなどを披露した他、日中経済協会の随行スタッフも千と千尋の神隠しの主題歌を披露するなど会場はとても盛り上がった。またその席上では今回の得難い活動への感謝を込めて学生らが互いに乾杯をしていた。私自身としても、様々な学校の学生が中国以外の場所で集い互いに助け合い学び合える機会を提供してくれた今回の活動にとても感謝している。

日　付：11月30日（木）【3日目】
大学名：北京外国語大学
氏　名：高聡昊

2 日目までに日本企業 2 社を見学した後、遂に同年代の人との交流の機会を迎えた。この日、私たちは大阪大学に向かい、そこで日本の学生と共に素晴らしい討論をすることができた。また討論の際の各グループはそれぞれ異なる学校の学生で構成されるなど、今回の交流を通じて私たち各学校の学生間の絆もより強まったように感じた。

各グループには日本人学生が 1 名つくことになったが、私たちのグループには大阪大学で中国語を専攻する 4 年生の学生がついた。彼の中国語はとても流暢で、中国語での交流には何の支障もなく頭の下がる思いだった。私たちのグループの討論テーマは中国と日本の大学生の就職及び生涯設計の違いについてであった。日本の学生からの紹介により、中国と日本の大学生の卒業後の就職及び進学の状況は大きく異なっていて、特に進学に関しては明らかな違いがあることを知った。中国の学生が修士や博士課程に進む理由は就職のためであるのに対し、日本の学

生が進学するのは研究を継続するためである。こうした研究に対する姿勢について、私たちはより前向きであるべきではないかと個人的には思った。

私とこの日本人学生はとても話が合い共通の話題に尽きなかった。昼食の際に私たちはさらに色々な話題で交流し、SNS の交換もした。彼は 1 年後に中国への留学を予定しているとのことで、中国で彼と再会できる日を楽しみにしている。

午後、私たちは温泉体験をするべく新幹線で箱根に向かった。そして宿泊先である天成園に到着した私たちはそれぞれ好みの浴衣に着替え、夜の懇親会では皆が出し物を披露するなど会場はとても盛り上がった。

夜間の温泉体験もまた夢中になるほど素晴らしく、温泉の身体と心への効果には驚かされた。食後に温泉に浸かると 1 日の疲れがすぐに取れるなど、非常に心地良い体験ができた。

日　付： 11月30日（木）【3日目】
大学名： 北京大学
氏　名： 黄彦皓

今日の日程：大阪大学－新幹線－箱根湯本温泉

午前、大阪大学を訪問し、先生の案内の下で間近にサイクロトロン施設を見学することができた。だが加速部分だけで、粒子源や後続の処理部分の見学ができなかったのはやや残念だった。このサイクロトロン施設は精度の良さで名高く、最大加速エネルギーは 400MeV で、なんと 0.01% 以下のエネルギー幅を実現する。見学の後、これまでの日程で最も面白かった学生との交流活動となった。田代大貴さんとの英語での交流はとても楽しく、自身の英会話能力を鍛える良い機会となった。田代さんはかつてアメリカに 2 年間留学したことがあり、とても流暢な英語を話していたため、個人的にとても羨ましく思った。交流においては、宿舎や学期などを含めた様々な点に関して中国と日本の大学における相違点が判明するなど多くの収穫が得られた。そして交流の後、私たちは連絡先を交換した。今後も連絡を取り続けたいと思っている。

大阪大学での活動を終えた私たちは新幹線で箱根に向かった。宿泊先での夕食では神戸牛や松阪牛よりも長い歴史のある近江牛に舌鼓を打つことができた。これまで中国国内で食べてきた牛肉とは雲泥の差があり、口に入れた途端に溶けるほどとても柔らかかった。また刺し身は食べ慣れなかったため、すき焼きの鍋で煮て食べた（本来の食べ方ではないが…）

夜は本場の温泉を体験した。初めは裸になる気まずさがあったが、勇気を出して郷に入っては郷に従えを実践した結果、今回の温泉体験はとても素晴らしく忘れ難いものとなり、身体全体が温まり、自分自身が生まれ変わったように感じた。

日　付： 12月1日（金）【4日目】
大学名： 北京第二外国語学院
氏　名： 馬碩

今日の日程はキヤノンと早稲田大学への訪問である。

朝、起床し朝食を済ませた私はホテルの後方にある玉簾神社を訪れ箱根での最後のひと時を堪能した。玉簾の滝の流れを見ていると自然と心が落ち着いてくるのを感じた。

箱根を離れた私たちはバスでキヤノン本社へと向かい、そこでは心のこもった歓迎を受けた。そしてキヤノンについてのスタッフからの紹介により、私は同社について新たな認識を得ることができた。キヤノンについてはカメラの評判が高いことは知っていたが、それ以外にも医療分野、印刷分野そして環境保全事業にも貢献していることを今回初めて知った。その後、私たちはかつて中国において勤務していた社員と交流をし、業務のペーパーレス化の普及により多少の影響を受けてはいるものの、現在のキヤノンは業務文書の印刷以外にも包装等の分野に携わっている他、同社は現在インクカートリッジの回収利用等の技術を普及させるなど、世界に向けた貢献をしていることを知った。

キヤノンを後にし、昼食を済ませた私たちは早稲田大学へと向かい同大学の学生との交流を行った。そこではまず早稲田大学の建学の歴史そして中国との関わりの歴史について理解を深め、早稲田大学と中国との深いつながりについて知ることができた。その後、早稲田大学の学生との交流となった。彼らは皆早稲田大学と北京大学のダブルディグリー・プログラムの学生であるため、中国語がとても流暢で、中には方言を話すことができる学生もいた。私たちは日本語を、そして彼らは中国語を使い互いに楽しい交流を行った。その中では、日本における就職では大学時代の専攻との関係性は薄く、日本の企業は非常に整った研修制度を有していることから、入社後に新たに技術を習得することができることを知った。交流を終えた私たちはその後の懇親会でさらに親交を深めた後、早稲田大学を離れホテルへと戻った。

日　付：12月1日（金）【4日目】
大学名：北京大学
氏　名：呉天可

早朝、私たちは箱根を後にし、高速道路経由で東京へと向かった。

午前、私たちはキヤノン本社を訪れた。私自身、キヤノンについてはカメラの他プリンターも扱っていることは知っていた。しかし今回の見学を通じてキヤノンに対しより多くを知ることができた。キヤノンの事業分野は非常に幅広く、主にカメラ、プリンター、医療、半導体の 4 つとなっている。キヤノンは進んだ光学技術を有していることから、医療測定設備分野において非常に進んでいるのみならず、ヒューマンケアも充実していて、利用者に快適な医療体験を提供している。また同様に、進んだリソグラフィ技術を有していることから、キヤノンの半導体製造能力も非常に優れている。その他、個人的に考えさせられた点として、キヤノンはさらに企業としての想いや責任感を有しており、この点については日本の企業において非常に具体的に示されている。キヤノンは環境保全への取り組みとして、カメラの部品の回収利用を行うことでエネルギーの損失を大きく減らしている。それと同時に、キヤノンはさらに宇宙探査や人工衛星等にも関わっている。同社では従業員との交流もすることができた。

昼食の後、私たちは早稲田大学へ向かった。早稲田大学は日本の有名な私立大学で、清代末期から中華民国初期にかけて中国の多くの先駆者が留学に訪れたことで中国の人々にもよく知られている。私たちはまず早稲田大学歴史館を見学し、その後早稲田大学の学生との交流を行った。その際、彼らの中国語がとても流暢だったことに驚かされた。彼らの多くは両親のどちらか、もしくは両親共に中国人で、中には中国で長年生活していた学生もいた。彼らとの交流を通じて私は早稲田大学への理解が深まったと共に、中国と日本の歴史及び中国と日本の関係について知ることができた。その晩私たちは夕食を共にした。

私たちが宿泊したホテルは有名なホテルニューオータニ東京で、李克強前総理も日本訪問の際に宿泊している。ホテルはとても豪華で、装飾も美しく、日本と西洋の要素が融合した独特なスタイルとなっている。その晩、私たちは表参道を散策した。この表参道は明治神宮の参道として大正時代に整備された道である。現在では道の両側に高級ブランド店が立ち並び、その先には明治神宮があったが、残念ながら夜間は開放されていなかった。それから私たちは日本のラーメンを食べに行った。日本のラーメンは独特な味で、麺が細くコシがあり、スープも美味しく、さらにチャーシューも入っていた。その後ホテルに戻り翌日のホストファミリーとの対面に心を躍らせた。

日　付：12月1日（金）【4日目】
大学名：中国人民大学
氏　名：範余芸舒

朝早くに出発したため、バスの中で音楽を聴いていると眠気に襲われ、気付いた時にはもう東京に着いていた。

東京はその他の大都市同様に人を選ぶ基準を有している。北京は一見心地良く味わい深い場所だが、実際には厳しい競争に生き残った人が暮らす場所である。そして東京はとても綺麗で多様化しているが、これまで時代の波と向き合い続けてきた人だけが満潮の後に残った海貝のように留まり、そして拾い上げられる。東京という樹木や庭園を

外から中に進んでいくと、その気高さが次第に見えてくる。

気ままな論理的ではない思考はここで終える。今回はキヤノンが私に向かうのではなく私たちがキヤノンへ向かった。誠実さこそ必殺技との言葉をよく耳にする。キヤノンでは国旗の掲揚、スクリーンの制作、細やかな説明、訪問体験、交流討論、贈答品などいずれにも趣向が凝らされていた他、同社の商業理念や産業構造も斬新で、責任感と共にマナーや誠実さを失わない優れた日本企業の姿を本当の意味で体現していた。

午前の体験により日本企業及び日本人への新たな認識が生まれた私たちは、緊張することなく大きな期待を胸にかねてより耳にしていた早稲田大学へと向かった。

バスが一度停まりバックを繰り返したため、私は最初道を間違えたのかと思ったが、視線を上げると、周囲の立て看板には「早稲田」の文字が書かれていた。どうやら名札のない門から入ると早稲田大学だったようである。平日の学生たちの様子は中国のそれとほとんど同じで、リュックサックを背に慌ただしく移動する人もいれば、自転車で颯爽と走る人もいて、さらには様々な言語や肌の色の留学生が活発に交流する様子も目にした。このため私は早稲田大学での交流会に対する期待がより高まった。

会議室に入りしばしの休憩の間、私たちは進んで近くの日本人学生と会話をした。開始時刻が近づくにつれ人も増えてきて、担当の早稲田大学の教員と学生らが続々と会場に到着した。早稲田大学に関する紹介はとても印象深く、担当教員は中国語を使い、早稲田大学と中国との交流に関する歴史について紹介していた。

夕食の際、私たち人民大学の学生は山下さん、高山さん、山本さんという 3 人の日本人学生と食事を共にし、尽きない話題に私たちの距離は急激に縮まった。お別れの際、早稲田大学の学生らは夜の強風の中、心からの笑顔で手を振り続けてくれた。これこそが私たちの中日友好交流におけるあるべき姿だと感じた。

日　付：12月2日（土）【5日目】
大学名：中国石油大学
氏　名：聶暁宇

朝 9 時、ついに私のホストファミリーと対面することができた。これまでは SNS で連絡を取っていたため、この日の対面では特に親しみを感じた。ホストファミリーは伊藤忠商事を定年退職した方で中国語がとても堪能だった。

私の希望によりまず私たちは秋葉原を訪れた。秋葉原はかつて電気街として有名であったが、現在ではアニメ文化の聖地となっている。初めて日本について知るきっかけとして、日本のアニメは大きな比重を占めている。秋葉原では逸品ぞろいのフィギュアや様々な周辺商品など目を見張るものがあった。65 歳のホストファミリーと共に秋葉原を訪れることになるとは思っていなかったが、彼の若者文化への理解は私の予想を超えていた。秋葉原での観光を終えた後、昼食では海鮮丼を食べたがとても美味しく、サーモンや鰻などいずれも新鮮でとても素晴らしかった。

午後は上野公園を訪れ東京国立博物館を見学した。ここで展示されている文物は非常に多く、展示品 1 つひとつを観賞する中で日本の歴史や文化への理解が深まる思いがした。

そしてこの日の最後は浅草寺を訪れた。ここを訪れる人は本当に多かったが、景色もまた本当に美しかった。

夜にホストファミリー宅に戻った後は彼らと一緒にたこ焼きを作ったが、こうした感覚は自分の家に帰って来たかのようであった。そして彼らから「中国で有名な日本人」について尋ねられた私は話が止まらなくなり、中島美嘉、新海誠、羽生結弦等様々な名前を出すと、彼らは日本の有名人の中国での影響力に驚いていた。

日　付：12月2日（土）【5日目】
大学名：北京大学
氏　名：高鈺萍

この日私はホストファミリー宅でのホームステイを始め、日本の人々の日頃の生活を実際に体験した。私のホストファミリーは日本航空及びその連結子会社であるスプリングジャパンで計 30 年勤務している黒羽英作さんとその奥様の英子さんであった。朝、黒羽さんは歴史そして文化的要素が色濃く残る美しい鎌倉に連れて行ってくれた。鎌倉では

円覚寺、円応寺そして鶴岡八幡宮を見学したが、黒羽さんの紹介により、日本の寺院における初代の法師の多くは南宋滅亡後に日本に逃れた中国の僧侶であるため、日本の仏教寺院建築や仏教的風習は中国の宋の時代と同じものとなっていることを理解した私は、日本文化は中国の隋や唐の時代の影響だけでなく、宋の時代の影響も大きく受けていることを知った。道すがら制服を着た鎌倉学園の学生の姿を目にした私は、中山服は孫中山氏が日本での亡命期間中に身に着けた日本の学生服であることに気が付いた。この日の移動では地下鉄やモノレール等の公共交通機関を利用したが、中国に比べそれぞれのルートで同種の交通機関を使った乗り換えの必要がなく、交通費はやや高めだが、とても便利であった。

黒羽さん宅に戻ると、住まいの環境がこぢんまりとしつつもとても綺麗で、ビーンバッグチェア、木製の家具そして整えられた柔らかなクッション、ブランケット、タオル及びスマート家電などが相まっていた他、美しいコップや時計といった芸術性と実用性を兼ね備えたアイテムなどからは、清潔さと快適さを好む日本人のライフスタイルを感じた。奥様からは豪勢な和風の夕食を準備頂いた。自分の実家同様に食材の多くを特定の産地から購入するなど品質にとても気を配っていた。違ったことと言えば、あっさり目の味付けで、海産物が多かったという点である。

日　付：12月2日（土）【5日目】
大学名：北京外国語大学
氏　名：邱悦嘉

この日はホームステイ体験の初日である。

朝、ホストファザーの西山佳夫さんと会った後、上野公園に向かい秋の爽やかな空気を堪能した。

上野公園内の銀杏並木の景色はうっとりする程美しかった。爽やかな秋風の中、黄金色の銀杏の葉が日の光の下で輝いている様子は通り全体が金色の優しさで包まれているかのようであった。私たちは銀杏並木を散策しこの秋の絵巻の世界に浸り、そして自然の静けさと美しさを堪能した。その後私たちは国立西洋美術館を見学した。この美術館には西洋芸術の珍しい作品が多く集まっていて、1 つひとつの作品がそれぞれ独自の物語を表現しているかのようであった。美術館はさながら心の避難所のようで、モネやピカソ等の大家の肉筆画に目を奪われた私はその場を去るのがとても名残惜しかった。

西山さんの人当たりの良さや優しさについては個人的にとても印象深かった。西山さんは親しみやすく、細かい気配りをされる方だったので、私たちは気楽に楽しい交流をすることができた。地下鉄で帰宅する際、私が快適に座ることができるように、西山さんはわざわざ始発の東京駅まで移動するなど、こうした細やかな気配りは西山さんへの印象をより強くしてくれた。それと同時に西山さんはかつて中国を訪れたことがあり、そうした経験から私たちには多くの共通の話題が生まれ、私自身としても西山さんのお話の中から中国のここ数年における様々な変化を感じることができた。

西山さん夫妻のお宅に着くと、私の緊張と不安は彼らの笑顔で一掃された。私たちは共に焼肉そして食事を楽しみ、賑やかな談笑の声に包まれた様子はまるで日本のドラマのようで、温かな家の中で互いの生活を紹介し合った。こうした素晴らしい体験に、私は明日のホームステイ生活への期待がより高まった。

日　付：12月3日（日）【6日目】
大学名：中国人民大学
氏　名：陳新宇

この日はホームステイの 2 日目である。この 2 日間の食事からは中国と日本における多くの違いを目にすることができた。例えば中国では通常ご飯を食べ終えるまで 1 つの大きな皿から少しずつ料理を取って食べる。対して日本では料理を一品作った後、先にそれらをすべて小分けにして次の料理ができるまで皆がそれぞれ自分の分を食べる。また日本の食事は飲み物、正餐そして食後のデザートの 3 つに分けられているのに対し、中国では飲み物やデザートはほとんどない。

朝食を終えた後、ホストファミリーの息子さんと共にお台場を訪れた。そこではまず日本科学未来館を見学し、老化の疑似体験といった斬新な体験をすることができた。また日本科学未来館には上海科技館とは多少異なる点が存在した。日本科学未来館では環境に配慮した工夫が施されていて、人々の日常生活に即した形で環境保護の理念を伝えているなど、環境保護を日常のものとしている。対して上海科技館の地球関連の展示エリアでは生態や種の多様性が強調されていて、生活に即したものとはなっていない。しかしながら、日本科学未来館の展示エリアの解説は専門性が高く、また分かりやすい写真がないことから、情報の受け手の範囲が狭く、見ていてとても疲れる印象を持った。対して上海科技館の展示エリアは理解しやすく写真も多いことから、人々にとって興味深いものとなっている。

次いで私たちはお台場のジブリ関連ショップと書店を巡り、書店では昭和の三作家の日本語の原著を見つけ、嬉しくなった私はそれらを後でじっくり読むために購入した。

その夜、私たちのグループは秋葉原を訪れた。その際最も印象的だったのは日本の店員の真摯な接客態度で、とても丁寧に、そして全力でお客さんの要望に応えようとしていた。今のところ彼らが元よりそうした性格なのかそれとも仕事だからそうしているだけなのかについては分からないが、中国国内における接客態度と比較した場合、少なくとも彼らの職業倫理はしっかりしていると感じた。

日　付：12月3日（日）【6日目】
大学名：北京第二外国語学院
氏　名：劉宇晗

この日は待ちに待った自由時間ということで、私は早くから様々な準備をしていた。

私はまず渋谷を訪れた。渋谷は東京のおしゃれな人が集まる場所で、様々なネオンの看板、賑やかな人混み、浮き上がる光と影などはいずれも渋谷のおしゃれな雰囲気を色濃く示していた。渋谷の街は伝統的な日本の街並みとはまったく異なり、世界各地から訪れた人々が色鮮やかな洋服を身に着け、自撮り棒を掲げてスクランブル交差点を行き来していた。

次いで新宿と原宿を訪れた。この２つの街はとても似ていて日本の若者に人気のある場所であり、おしゃれ、美食、おもちゃ、化粧品など様々な店舗が軒を並べていた。ここは従来の日本に対する印象である落ち着き、抑制そして上品さとは完全に異なる様相を呈していた。人々は大胆なひいては奇抜な洋服を身に着け、整然さがなく、ひしめき合っていた。塵ひとつなかった道路も最早存在せず、ところどころにゴミが散乱していた。こうした光景は私がここ数日の体験により日本に対して生まれた固定観念を打ち破るもので、考えを改めさせられた。私の従来の認識は一種のステレオタイプで、日本には抑制との一面があるだけでなく、抑制の中にも色鮮やかな一面が存在しているのかもしれない。旅とは人や物事に対する固定観念を絶えず打ち破り、直接の体験の中から様々な角度で人や物事を見て、１つの点に拘るのではなく多くの面から判断していくことなのだろう。

日　付：12月3日（日）【6日目】
大学名：北京外国語大学
氏　名：張嘉桐

ホームステイ２日目のこの日、ホストファミリーは一般の日本人家庭の週末の生活を体験させてくれた。素敵な１日は充分な睡眠から始まった。週末に自然と目が覚めるまで眠れることはとても幸せなことである。幸運にも町内の餅つき大会があり、参加することになった。朝食を済ませた後、私たちはすぐに会場に向かったが、すでに多くの人が集まっていた。これほど賑やかな光景はこれまで見たことがないものであった。ホストファミリー宅近くの庭園内に小さな出店が並び、ソーセージの他、お汁粉や豆腐のスープそして餅などが売られていた。また大きな杵で何度もつく餅つきの様子を見ることができるだけでなく、実際に体験することもできた。私たちは一緒にきな粉、あんこ、オリジナルの３種類の味の餅を食べたがとても美味しかった。だがこの時私は一抹の寂しさも感じた。私は現在北京で大学に通っているが、自分の両親は別の街にいるため、こうして一家総出で週末に遊んだり、共に週末をのんびり過ごしたりといっ

たことはすでに何年も経験していない。また松木園さんの話では、仕事がどれほど忙しくても夜は時間通りに退勤し、家族と共に夕食をとり、おしゃべりをするとのことであった。対して中国の生活リズムの速さから私は久しく家族と食卓を囲んでおらず、ほとんどの場合は自分 1 人で食事をしている。そのため私は家族と一緒の日々がとても懐かしくなり、家族と一緒に居ることの重要性を感じた。

ホストファミリー宅では可愛いお子さんと一緒にゼリーを作った。とても簡単なおもちゃだったが、今回の私のホームステイのためにわざわざ準備していたとのことで、それを知った私はとても胸を打たれた。またゼリーを作る際に思ったのだが、お子さんの日本語は大人の話す日本語より多少理解が難しかった。これは面白い発見であった。

私が日本の文化を体験できるようにと、この日の昼食は季節をやや無視して本来は夏に食べる流しそうめんを食べた。松木園さん宅には流しそうめん器があり、水が流れることでそうめんを容器の中で回すという珍しいものであった。そして特になんの調味料も入れていないのだが、なぜかそうめんがとても美味しくなった。

1 泊 2 日のホームステイも終わりを迎え、午後に私は松木園さん一家と名残惜しい中お別れをしてホテルへと戻った。お別れの際、彼らからはまた日本を訪れ彼らに会いに来てほしいと何度も告げられ、私は思わず涙が溢れてしまった。

日　付： 12月4日（月）【7日目】
大学名： 北京大学
氏　名： 何彦瑾

この日の午前、私たちは三井住友銀行を見学した。同銀行は 2001 年に三井グループ傘下のさくら銀行と住友グループ傘下の住友銀行が合併して誕生した。三井住友銀行は顧客本位の立場から、ローンの必要性の評価を行った上で、必要な場合に提供している。

三井住友銀行の見学の後、私たちは日比谷公園を訪れ松本楼で食事をした。日比谷公園は日本初の洋風近代式公園で、秋には黄金色の銀杏で名高い。松本楼は 1903 年に開店した洋風レストランで、孫中山氏が盟友の梅屋庄吉氏と共にしばしば訪れていた場所である。この日比谷松本楼において私は孫中山氏と梅屋庄吉氏が知り合った経緯そして中国の革命運動における梅屋庄吉氏の多大な貢献について知ることができた。

次いで私たちは中華人民共和国駐日本国大使館を訪問し、今回の日本訪問における企業や大学そして日本人家庭での踏み込んだ交流を通じた感想などを宋耀明公使及び大使館職員に報告した。

その後私たちは丸紅を見学した。同社は 140 年を超える歴史のある総合商社である。私たちがこれまで訪れたその他の日本企業（パナソニックやキヤノンなど）とは異なり、丸紅グループにはこれといった商品や分野はないが、同社の事業は輸出入、商品技術サービス貿易、投資及び融資を含み、さらにエネルギー産業を支柱にハイテク以外の様々な分野に関わるなど多くの国で事業展開している。

この日はスケジュールが密集していたが、日本の企業と沢山交流することができ、とても充実していた。

日　付： 12月4日（月）【7日目】
大学名： 中国石油大学
氏　名： 柴穎

私たちは三井住友銀行と丸紅を見学し、日本経済の強大さそして独特な企業文化の魅力を感じることができた。

初めに私たちは三井住友銀行を訪れた。同銀行は日本でも長い歴史のある銀行の 1 つで、また世界的にも有名な金融機関である。銀行内部において私たちは現代的な金融施設及び効率的な業務プロセスを目にし、世界でもトップクラスの銀行である三井住友銀行の能力及び競争力を感じることができた。それと同時に私たちはさらに三井住友銀行の社会的責任及び持続可能な発展に向けた取り組みや貢献について理解する中で、企業の社会的責任感及び環境保護意識についてこれまで以上に認識を深めることができた。

その後私たちは丸紅を訪れた。同社は日本で最も長い歴史を有する貿易会社の 1 つで、また世界的にも有名なグ

ローバル企業である。そこでは丸紅の世界における事業及び経営戦略について知ると共に、日本の企業文化におけるイノベーションやチームワークの重要性について知ることができた。丸紅の貿易分野における能力や経験は国際貿易及びグローバル化というものに対するより深い認識を私にもたらしてくれた。

この日の見学を通じて私は日本経済の強大さそして独特な企業文化の魅力を感じることができたと同時に、ビジネス交流そしてグローバルな提携の機会の重要性を改めて認識した。自身のキャリアの発展及び成長に役立つ貴重な経験そして教えを得るために、今後も沢山の企業や経済システムを知る機会があることを願っている。

日　付：12月4日（月）【7日目】
大学名：北京第二外国語学院
氏　名：史子鑫

この日は帰国の前日で、スケジュールが最も密集した１日でもあった。

この日最初の訪問先は私が日本経済のニュースで何度も耳にしていた三井住友銀行だった。私の三井住友銀行への第一印象は日本の大手銀行の代表格であるというだけで、銀行自体の優位性や事業内容についてはまったく知らなかった。そうした中、今回の訪問では特に、現在日本において経済が停滞し中国国内にも様々な経済問題が存在しているとの背景における、日本の経済社会において計り知れない役割を果たす三井住友銀行の事業内容、経営モデル、独自の優位性について知ることができた。その他、上海交通大学金融学院出身の姚女史からも外資企業又は海外での勤務に関する経験談の紹介があり、日本の勤務形態や労働強度について知ることができた。またさらに日本の銀行のロビー及びスムーズな業務の様子を見学したことで、中国の銀行と比較した日本の銀行の優位性や違いについて把握することができた。

その後、私たちは東京都心の日比谷にある松本楼を訪れた。ここでは中国と日本の民間において長く続く友好交流の歴史を改めて感じることができた。孫中山氏、宋慶齢女史そして梅屋庄吉氏の友情に伴うエピソードである「君は兵を挙げたまえ、我は財を挙げて支援す」との言葉に、その場にいた私たちは両国の友好への思いを新たにした。午後の日比谷公園はうららかな日差しで、多くの人で賑わい、燃えるような紅葉が一面に広がっていた。宋慶齢女史のピアノが松本楼のホールに展示されていたが、悠然とした歌曲の下、中日友好の雰囲気は穏やかさの中で次第に高まっていった。

中華人民共和国駐日本国大使館では、私たちの今回の日本訪問における収穫などを公使に報告し、公使からは私たちの成果への称賛を頂いた。そして日本というこの隣人の優れた部分を謙虚に学び、中国をより良くアピールし、中日友好を末永く継続していくよう励ましの言葉も頂いた。

そして有名な丸紅株式会社ではその市場シェア、グローバル事業及び同社が誇るリスクマネジメントメカニズムについて理解を深め、私の従来的な企業形態への認識は改めて打ち破られた。丸紅独自のリスクマネジメントメカニズム及び多様なグローバル事業からは日本企業の強大な再生能力そして市場開拓能力を感じた。夜の懇親会での同社従業員との交流では、彼らの中国語の能力そして中国に対する独特な認識に驚かされると同時に感服させられた。

日　付：12月5日（火）【8日目】
大学名：中国人民大学
氏　名：張寧

この日は私たちの訪日活動の最終日である。

朝に集合した後、私たちはそれぞれホテルニューオータニのごみ処理、中水処理そして配電設備を見学した。見学の際は、ホテルニューオータニの環境保全における取り組みを直接的に感じることができた。その後、私たちはホテルニューオータニ内の日本庭園を散策し、枯山水や錦鯉そして滝といった景観を楽しむなど、日本庭園の美意識やスタイルを堪能することができた。

お昼にはホストファミリーなど今回の活動に関わった皆さんが送別会に訪れ、私たちは食事をしながら交流を深め

た。そして送別会の最後に私たちはホストファミリーをはじめとする今回の活動をサポートしてくださった皆さんへの感謝を込め、中国語と日本語による『未来へ（中国語名：后来)』の歌を届けた。歌詞にある通りに、今回の旅は「2度とない」探求学習の旅である。そう思った途端にこの後の避けられない別れに感慨が湧き、思わず涙が流れてしまった。

そうした中、今回の様々な出会いに伴う縁というものを私は強く感じた。日本の茶道における、それぞれの出会いは一生に一度であるということを心得た上で、互いの出会いを大切にしなければならないという意味の「一期一会」との言葉にある通り、今回の活動においても私たちは様々な人と出会うと同時にお別れをしているため、私たちはそれぞれの出会いの機会を大切にし、「一期一会」の縁をしっかりと噛み締める必要があると感じた。

日　付：12月5日（火）【8日目】
大学名：中国石油大学
氏　名：斉琴

今回の訪日活動の最終日となった。

午前はホテルニューオータニのエコ施設を見学した。ホテルニューオータニでは毎日 1000 トンの廃水が生み出されるが、分解や沈殿によりホテル内のトイレの洗浄や庭園の灌水に利用している。それ以外にも木製受水槽において殺菌浄化した水については飲用可能なものとなっている。同ホテルにはさらに自家発電施設があり、価格に応じ天然ガス又は灯油を選択した上で、最大でホテル全体の需要電力の 30% を供給することが可能となっている他、緊急時の電力供給との重要な役割を果たしている。またここでは毎日 5 トンの生ごみが生み出されるが、ホテルニューオータニのリサイクルシステムを通じこれらすべてを堆肥とした上で契約農家に提供している。その後、私たちはホテルニューオータニの日本庭園を散策したが、小さな橋、水の流れ、錦鯉などあらゆる場所が巧みに配置されていて味わいがあった。

最後は送別会で、私のホストファミリーも参加してくれた。英語が話せる娘さんが仕事の都合で参加できず、私の独学で勉強した日本語も上手ではないため、交流において多少難しい部分もあったが、それでも単語を調べながら交流することはできた。わざわざ足を運んでくれた他、様々な話題を提供してくれたホストファミリーに改めて感謝している。

団歌『未来へ（中国語名：后来)』の歌声の中、私たちは今回の訪日活動を終え、空港へと向かった。皆さんとのお別れはとても名残惜しいが、再会の時を楽しみにしている。